

(様式第1号)

研究No. (記載不要)	18 - 文学 - 5
-----------------	-------------

平成18年度配分 研究成果の概要

研究名	コミュニティにおける多文化状況の国際比較				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長特別研究費				2300千円
研究者氏名 (代表者)	学部名	学科名	職	氏名	共同研究の場合の分担
	文化政策	国際文化	教授	馬場 孝	研究統括、ナショナリズム論からみた多文化社会の展望と条件
共同研究者	文化政策	国際文化	教授	鈴木 元子	ニューヨークの多文化社会ーブルックリンを中心にー
	文化政策	国際文化	准教授	池上 重弘	インドネシア人留学生コミュニティの日豪比較
	文化政策	国際文化	准教授	岡田 建志	多文化社会におけるアジア系住民ーベトナム系住民を中心にー
	文化政策	国際文化	准教授	イシカワ エウニセアケミ	浜松市における日系ブラジル人児童・生徒の教育の実態
	文化政策	国際文化	准教授	下楠 昌哉	北アイルランドのコミュニティにおける多文化状況と文化活動の研究
発表の方法	1 紀要		号数	第 7 号 (平成19年3月発行)	
	2 学会等での発表 学会等名: 詳細は別紙参照		発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日 平成 年 月 日	
	3 その他 発表の方法: 別紙参照		発表日 (発表 予定日)	平成 年 月 日	

注:配分を受けた翌年度の6月末までに提出

(研究の目的等)

近年の加速的グローバル化は地球規模のあらゆるシーンで多文化状況をもたらした。とりわけ、政治的、経済的要因による国境を越えた人の移動が今日の多文化社会の度合いの強さを我々に認識させ、その意識化は国際社会を理解するうえで不可欠である。しかし「多文化社会」と言っても、個々の成立過程や要因、様態、問題点は極めて多様かつ複合的である。本研究は、国際文化学科の6名の教員が各自の研究領域でみとめられる多文化状況のケースに焦点を当て、その専門的視座から主にコミュニティ、さらには移民、エスニシティを共通項として事例を考察した。メンバー相互の情報交換により個別から全体、全体から個別というフィードバックをとおして、世界における今日の多文化状況を比較し理解することを目的とした。

(研究の実施方法等)

【馬場 孝】 ナショナリズム論からみた多文化社会の展望と条件

ナショナリズム論から今日の「多文化社会」に関する議論と現実を考察することが本研究の目的であり、ケーススタディと理論研究の相互検証を通してこの作業を行った。

【鈴木 元子】 ニューヨークの多文化社会—ブルックリンを中心に

資料の収集、精読と分析、ニューヨークでの現地調査(今回はマンハッタンだけではなくブルックリンやクイーンズ、ブロンクス地区まで広げる)、写真等の整理・分析、原稿執筆。

【池上 重弘】 インドネシア人留学生コミュニティの日豪比較

1980年代からアジア系留学生が増加している日本とオーストラリアにおいて、インドネシア人留学生のコミュニティがどのように形成され機能しているかについて、送り出し国の状況も視野に入れて調査した。

【岡田 建志】 多文化社会におけるアジア系住民—ベトナム系住民を中心に—

多文化社会におけるアジア系住民のコミュニティの事例として、フランスのベトナム系住民コミュニティの形成の歴史および言語・教育・文化活動等の状況に関して文献調査を行なった。

【イシカワ エウニセ アケミ】 浜松市における日系ブラジル人児童・生徒の教育の実態

浜松市の小・中学校の事例を元に、この子どもたちが日本で教育を受ける際、言語をはじめ、習慣、文化の違いなどから生じる諸問題について考察・分析を行った。また、彼らが日本の社会にスムーズに適應できるように、教育現場で何を改善すべきであるのかを追求した。

【下楠 昌哉】 北アイルランドのコミュニティにおける多文化状況と文化活動の研究

北アイルランド、コールレインにおける文化活動「ハンズ・オン・ヒストリー」に関する調査報告後の現地の状況を、プロジェクトの責任者であるロバート・カラン博士に情報提供を請い、追跡調査した。関連学会に参加して研究発表をし、情報交換を行った。

(得られた成果等)

各メンバーはそれぞれ国内外で調査・情報収集を行った結果を持ち寄り、メンバー全員による研究会を2006年度後期に連続して開催、各自の研究発表の場を持った。

本研究では国際文化学科教員の共同研究であることから、各メンバーが提供する個別的事例を相互理解することで、学科カリキュラム履修上、また従来の専門領域において便宜上分かれている地域圏の枠を越えて、世界の多文化社会の現状を統括的に把握する機会となった。さらに研究結果は、各メンバーの演習を含む授業というかたちで本大学の教育に反映された。

■ 1 ■ 活字での発表

1. 紀要

池上重弘. 2007. 「日本とオーストラリアの高等教育機関におけるインドネシア人留学生—統計資料の分析にもとづく最近の動向分析—」『静岡文化芸術大学研究紀要』7:7-19.

2. 学会誌等

イシカワ エウニセ アケミ. 2006. 「家族は子供の教育にどうかかわるか」編著: 広田照幸『子育て・しつけ』日本図書センター、pp. 290-303、総頁374

イシカワ エウニセ アケミ. 2007. 「進学を果たした日系ブラジル人の若者の学校経験」科研費(平成16年～18年度)科学研究費補助金(基盤研究B(1)課題番号16330109)研究代表者: 宮島喬『外国人児童・生徒の就学問題の家族的背景と就学支援ネットワークの研究』pp. 75-87. 総頁157.

下楠昌哉. 出版予定. 「北アイルランド問題と草の根平和運動」『アイルランド・ケルト文化を学ぶ人のために』風呂本武敏編、世界思想社より出版予定。

■ 2 ■ 学会等での発表

1. 学会・研究会での発表

Baba, Takashi. 2007. Human Security Reconsidered: Through the Braudelian Looking Glass with an IR Framework. International Studies Association. (2007年3月1日)

池上重弘. 「日本とオーストラリアにおけるインドネシア人留学生の動向」神田外語大学異文化コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト「日本のインドネシア人社会」第4回ワークショップ(2006年9月30日 於神田外語大学)

イシカワ エウニセ アケミ. Cultural and Language Barriers inside the Families – The case of Japanese-Brazilian Families in Japan – (「在日日系ブラジル人家族内における言語・文化の壁」) XVI ISA World Congress of Sociology (第16回国際社会学会(ISA)大会) July 23rd to 29th, 2006, in Durban, South Africa. (2006年7月)

イシカワ エウニセ アケミ. 「在日日系ブラジル人女性」日本移民学会第17回年次大会(大阪商業大学)(2007年6月)

2. 学内研究会

第1回研究会 (2006年12月9日に静岡文化芸術大学にて開催)

池上重弘. 「日本とオーストラリアの統計資料に見るインドネシア人留学生」

イシカワ エウニセ アケミ. 「浜松市における日系ブラジル人児童・生徒の教育の実態」

下楠昌哉. 「北アイルランドのコミュニティにおける多文化状況と文化活動の研究」

第2回研究会 (2007年1月19日に静岡文化芸術大学にて開催)

馬場孝. 「『東アジア共同体』構想: 議論の枠組みと展望」

鈴木元子. 「ニューヨークにおける多文化状況—視察・調査報告—」

岡田建志. 「フランスにおけるベトナム系住民」

■3■その他

鈴木元子. 「モザイク都市ニューヨークー多文化状況の観点からー」静岡県西部英語教育研究会にて講演
(2007年8月3日)

鈴木元子. 2007年6月7日/14日、静岡文化芸術大学の「都市文明論」の授業の中で、撮影してきた写真を
学生たちに見せ、講義に一部成果を反映させた。